氏　　名	岩田（いわた）　明子（あきこ）
学　　位	博士（芸術学）
学 位 記 番 号	博（芸）甲 第 21 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 12 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
論 文 題 目 名	不住斎竹心紹智研究 ―思想と背景―
審　査　委　員	主査　倉澤　行洋 副査　Horst Siegfried Henneman 同　　乾　正雄

一、論文内容の要旨

目次

本博士論文は「序論」、「本論二篇」、「資料」から成る。序論では先行研究、本研究の課題などを述べ、竹心の著述について概要をまとめている。本論第一篇は、竹心の系累と周辺の人物についての調査報告であり、いわば竹心の人間関係の考察を行った。第二篇は、竹心の著述や作品を通しての思想についての考察である。そして、資料には、竹心に関する年表と竹心の著述でこれまで未翻刻の著述（射和文庫蔵）の翻刻を４種載せている。本論文の目次は次の通りである。

序論

はじめに

第一節　不住斎竹心紹智についての研究状況

第二節　本研究の課題及び研究方法

第三節　竹心の著述について

1．竹心の著述

2．竹心の著書をとりあげた書

本論

第一篇　竹心の系累と周辺の人物

序

第一章　竹心の系累

第一節　実父南條玄斎紹三について

1．南條玄斎紹三と建仁寺
2．南條玄斎紹三と西本願寺
3．美濃大垣における南條（南条）姓について
4．『国書人名事典　第三巻』より
5．まとめ
第二節　北尾家と藪内家とのつながり
1．北尾家の歴史
2．北尾春圃
3．北尾春倫、春轍
4．春倫の識語のある曲直瀬道三著『涙墨紙』写本より
5．比老斎竹陰紹智
6．大垣中央図書館蔵の書状
7．まとめ
第三章　竹心の周辺の人物
第一節　参禅の師　建仁寺中興開山　雲外東竺
1．雲外東竺について
2．雲外和尚百寿賀哥
3．玉椿之花筒と和歌
4．茶碗　禅師
5．八十八歳賀詩
6．まとめ
第二節　西本願寺との関係
1．本願寺との関係

２．須彌蔵について
３．まとめ

第二篇　竹心の思想
序
第一章　竹心からみた「茶湯」「茶道」の意味の特徴
１．竹心著述以前における「茶湯」と「茶道」の語の使用状況について
２．茶湯
３．茶道
４．まとめ
第二章　道具の視点から
第一節　竹心好女郎花蒔絵棗に込められた珠光の精神
１．竹心好「女郎花棗」の作品の概要
２．二つの箱書　～竹心箱書と自得斎箱書
３．珠光の「御尋之事」
４．女郎花絵賛掛物
５．「茶左右礼和止至善」
６．まとめ
第二節　「不住斎竹心背面自画賛」について　～視線の先にあるもの
１．『真向翁』と『茶話真向翁』について
２．竹心著『真向翁』の執筆意図
３．作品の概要
４．まとめ

第三節　竹心の道具の一覧
1．竹心道具の特徴
2．竹心の道具の一覧
第三章　竹心からみた当世の茶湯の世界
第一節　正風流と異風流
1．正風流
2．異風流
3．藪内家の位置づけ
第二節　当世の茶湯界への指摘　～竹心の著述の観点から
1．正直清浄の道から離れた茶
2．禮和質朴の法から離れた茶
3．本意を損なう例
4．誤って伝わっていること
5．まとめ
第三節　竹心以外の人の当世の茶湯批判
1．『独語』
2．『南方録』
3．『清巖禅師茶事十八ヶ条』
4．『茶話抄』
5．『又玄夜話抜粋』
6．まとめ
第四節　正直清浄の道、禮和質朴の法とは
1．正直の道

2．清浄の道
3．禮和の道
4．質朴の道
5．まとめ

むすびに
謝辞

資料　年表
射和文庫蔵　竹心著の写本の翻刻
『数奇の記』
『茶人石うす殿の記』
『初音の記』（右の紀事）
『茶道たのもしくの記』

第一篇における問題の所在と考察の結果

人間関係は個人の存在を映す鏡であり、集団の中にあってはその人の位置や役割が反映されるものである。第一篇は竹心の系累及び周辺の人物との関係についてとりあげた。

第一章においては竹心の系累についての調査である。第一節では竹心の実父に遡り調査を行った。藪内家五代家元不住斎竹心紹智（一六七八―一七四五）は四代家元蕉雲斎剣渓紹智（一六五四―一七一二）の内室、古雲貞松（―一七五二）の実弟であり、剣渓の女婿となり家元を継承した。竹心の実父の南條玄斎紹三（一六二一―一六八五）は、これまでに美濃大垣の儒者［永島福太郎，一九九三］、西本願寺の門主の

典医［伊藤東慎，一九九四］、京都の医家の出など諸説あり、竹心自身も美濃大垣の儒者［村井康彦、筒井紘一、赤沼多佳篇，二〇〇一］というのが通説となっている。

大垣における南條（条）姓、医業の知識を学んだ流派や場所の門人録、京での医者としての記録、西本願寺での記録などについては現段階では南條氏の確認に至らなかった。しかし、建仁寺両足院の伊藤東慎氏によれば、南條氏の妻は藪内家の出身であり、娘は剣渓に嫁ぎ、息子が剣渓の女婿となり、建仁寺三〇九世以成東規（一六〇九―一六八五）に参禅し、墓地が建仁寺両足院にある点などを指摘している。これらを年代と照らし合わせると、南條氏は寂如上人の典医だった可能性が高いと考えられる。また、竹心は七歳で実父と死別してから、二十五歳で北野天満宮八百年萬燈会において藪内家の人間として献茶を行うまでの間、どこで過ごしていたのかという疑問については、証拠となるものは見つかっていないが、建仁寺三一〇世雲外東竺に参禅している点なども踏まえると美濃大垣に住していたというより、むしろ京で過ごしていた可能性が高いと考えられる。

第二節は北尾家と藪内家についての関係である。

南條氏と北尾家は美濃や医師という点で関係があるのか、藪内家と大垣藩を繋いだものは何かについて調査を行った。今回、北尾家に関していくつかのことが明らかとなった。①大垣に現存する『河地家文書』の「俵町宗門改帳」（一七〇七年、一七二一年）より北尾春倫一族の家族構成、②春倫の父親の医術は『山脇家門人帳』（一六七八―一六九二）に記載があり、曲直瀬流の流派であったことが判明、③春倫については『平安人物志』（一七六八年）、『京羽二重』（一七六八年）に職名や所在地が掲載、④杏雨書屋蔵『山脇東洋門人帳』には一七六二年から六八年にかけて六人の門弟の取次をしていたことを確認した。これらにより、春倫は京で医師としての立場を確立し、竹心の女婿となり、竹心のもとで茶道を学んでいたことが明らかとなった。

藪内家と大垣藩の結びつきを裏付ける手紙十八点（大垣中央図書館蔵）は、六代家元比老斎、八代家元竹猗との関係を示すもので、竹心の足跡は大垣では現段階はみられなかった。美濃大垣と西本願寺の関係は、西本願寺の寂如上人（一六五一―一七二五）の代からは結びつきが始まり、藪内家と大垣藩の関係については、美濃大垣出身の北尾春倫の頃から始まった可能性が高いと考えられる。

医学史の面から調査したところ、北尾春倫の識語がある曲直瀬道三著の『涙墨紙』の写本（一七三六）には「然則老嫗者南条翁之桑君也、南条翁者我桑君也」とあり、南条翁は我が祖先あるいは師という意味の一文の記載がある。文中の南条信斎という人物と南條玄斎の関係性までには至らなかったが、北尾家と南條家を繋ぐ可能性のある文献であり、今後さらに調査を進める必要がある。

第二章においては、竹心の周辺の人物についての調査を行った。

第一節では竹心の参禅の師である建仁寺の雲外東竺（一六二九―一七三〇）との関係について、雲外和尚百歳の高寿に達した際に竹心が贈った七言絶句と和歌に添えて贈った花筒や茶碗などから、雲外東竺が逝去するまで師弟関係で強く結ばれていたことが確認できた。

第二節では西本願寺との関係について、藪内家は西本願寺の茶道師家としての役割を担い、寂如上人の代までは交流の記録が残る。しかし、寂如上人遷化以降、西本願寺の継職問題が起こり、竹心晩年の二十年間は西本願寺との関係が途絶える。藪内家焼失後、西本願寺から移築された須彌蔵は、寂如上人が竹心に依頼して享保年間に建てたと伝わっているが、八代家元竹猗の西本願寺に宛てた手紙には文如上人が依頼したと記載があり、真偽の特定には至らなかった。しかし、須彌蔵の前面の柱に彫られている七言二句には、竹心の茶道の正風を守る強い信念が込められていることは確認できた。

第二篇における問題の所在と考察の結果

第二篇は、竹心の思想についての分析と考察である。

第一章においては、竹心の著書にみられる「茶道」と「茶湯」の語をどのようにとらえていたかについてである。まず、竹心の著述以前に書かれた茶書三十三種をとりあげ、「茶」に関する語の使用について時代を追いながら調査し、その上で竹心の著述から「茶湯」「茶道」の語を抽出し分類し特徴をまとめた。その結果、寺院や武家社会で飲まれていた喫茶や茶禮は、珠光により茶に「道」の精神が加わり、紹鷗で「茶湯の道」という語が使われ、「數奇の道」「茶湯道」「數奇道」「茶道」という語に至っていることを確認した。現在用いられている「茶道」が意味する語は一六四〇年代の『長闇堂記』、一六六〇年代の『御飾書原文』『清巌禅師茶事十八ヶ条』の頃から徐々に用いられ、一七二〇年前後からよく使われ始めていることが明らかとなった（茶をつかさどる人を意味する「さだう」（茶堂、茶道）という言葉も『酒茶論』（一五六四）からみられる）。しかし、「茶道」という語は『江岑夏書』、『隨流斎延書』や山田宗偏『茶道便蒙抄』、『小堀遠州書捨文』、『杉木普斎伝書抄』では殆どみられない。つまり現在使われている「茶道」が意味する語は家元や家元周辺から発現されたものではないとみることができる。竹心が著述を始めた頃はまさに「茶道」という語が広く使われるようになり始めた時期であり、茶湯人口の増加に伴い、道から離れた遊芸化した茶湯が広まった時期とも重なる。竹心のとらえた「茶道」の意味には、禅と儒教の二面性を含み、修己治人の思想も含んでいることが明ら

かとなった。

第二章は、道具の視点から、竹心の精神性について考察した。

第一節は、竹心好女郎花蒔絵棗について棗の箱書に記した歌や、「女郎花絵賛」や著述を手掛りに、女郎花棗の制作背景を検討した。この棗に描かれている女郎花は、花弁の美しさよりも直立した茎の姿を強調している。利休へ続く道程を歩み、現世の風潮に流されることなく茶道に向かう竹心の姿勢は、女郎花の天に向かってまっすぐ伸びた姿に重なる。竹心の著述『源流茶話』『茶道霧之海』『行言録』に記述されている「お尋の事」にある時流におもねらない珠光の茶湯の精神が、女郎花棗を創作する原点であることが明らかとなった。

第二節では、不住斎竹心背面自画賛を取り上げ、竹心の著述や関竹泉の『茶話真向翁』『続茶話真向翁』などから画賛の意味、制作背景について明らかにした。竹心の背面坐像は、これまでの研究では、壁に向かっていると考えられてきた。しかし面壁打坐の姿と解釈するならば、賛と絵がかみ合わない。なぜならば、面壁打坐の場合あらゆる執着から解放された世界観が展開するので、世間の目からも解放されているはずである。利休が改正大成した茶道を守ることに執着している姿は面壁打坐の世界観とは異なる。竹心の視線の先には壁ではなく利休が鎮座し、利休の精神からかけ離れた世間からみれば竹心の姿は背面を向いていると写ったとの解釈に至った。

第三節では、竹心の自画賛、自作の茶碗や茶杓、竹心がつけた銘のあるものなど、百十三点について、様々な文献や図録などから一覧表にまとめた。その結果、竹心がつけた銘に着目すると、禅や儒教のみならず、漢詩や能などが創作に影響を与えていることが明らかとなった。

第三章においては、竹心からみた当世の茶湯の世界観について、著述から明らかにした。第一節は、竹心のとらえた風流についての考察である。竹心は茶湯の風流を正風流、異風流の二つに分類し、正風流は自然と閑雅なる風のことで利休が改正大成した茶道をいい、異風流とは正風流以外のものと定義し、さらに一時の風流と殺風流に分類している。異風流に対する批判を展開し、藪内家のあるべき姿勢、位置づけは正風流にあると述べる。竹心のとらえた風流はおのずからなるもので、その状態が完成した状態であると考え、あえてそこにつくろったり、求めたりすることは完成した状態から離れていくことになると考えている。

竹心の著述の意図は、利休の正風が異風流に妨げられ、後世に伝わらないことを竹心は案じ著したのである。当世の誤りを「魚目のなぞらへ」と批判し、「当世と古儀との齟齬」を指摘し記すことで「迷ひを解て目ざまし草にし後世に伝之」（『目覚まし草』）と述べ、茶人を望ましい方向へ導こうと著述を残している。孔子の学問が異端邪説のために妨げられ、後世に正しく伝わらないことを心配して作られた『中庸』の

著述の意図とも共通すると考えられる。

第二節では当世の茶湯界への指摘について、『源流茶話』『茶道霧之海』『茶道朱紫』『茶友絶交論』『行言録』などから批判箇所、指摘した点を抽出し体系的に整理し、竹心が理想とした茶道の姿を浮き彫りにする一助とした。その結果、竹心の当世の茶湯に対する批判は量的には「禮和質朴の法」の部分に集中しており、家元の立場から初心者を惑わせる行為に対して鋭い批判を展開している。また、当世の茶湯と利休の正風の違いを明らかにし、詳細に間違いを正している点も特徴的であることが明らかとなった。

第三節では竹心の憂えた当世の茶湯に対する評価と、他者の客観的な評価との違いについて検証した。竹心とほぼ同年代の様々な立場から、当世の茶についての評価をとりあげ、竹心との比較を試みた。その結果、竹心の指摘した点は他者の評価と合致し、竹心は事実を客観的にとらえていたことがわかる。ただし、千家と竹心を比較するならば、千家は多くの茶湯を学びたいという人に門戸を開き「花鳥、茶かぶき」を考案し茶湯を楽しむ中で自己の「事サ」を磨き茶湯の心を学んでもらう立場にたつ。一方、竹心は、当世の茶湯に門戸を閉じるものの、多くの情報を収集・分析し、問題の所在を明らかにし、初心者、後世の人のために多くの著述に残す。当世の茶湯に対して共通認識をもつものの、伝統を守りつつも時代の波に調和した形を模索した千家と、利休の正風に立ち返り茶湯を浄化しようと試みた竹心とでは当世の茶湯に対する対処の仕方が大きく異なることが明白となった。

第四節は利休が改正大成した正直清浄の道、禮和質朴の法について検討した。

利休をことさら強調するのはなぜか。竹心は茶湯における倫理観、つまり善悪、正邪の判断基準を利休に求めている。竹心は利休の改正大成した茶道を模範とし、そこに普遍的価値をおき、家元としての倫理観を貫きとおしている。

竹心は茶道は「内意禪ニよりて心をすましめ正直清浄を宗とし外世法仁義禮和の行儀ニ則り」、その上で「人と共にたのしミ侍れは上下の禮正しく朋友の交わりあつふして淳和の風にあふぎ世に有がたかるべき道」となると述べている。つまり茶道を通して自己と対峙する修道面（正直清浄の道）と、秩序・法を含む亭主と客と豊かな人間関係を育む社交面（禮和質朴の法）の二面性を含み、竹心の世界観は、禅を中心とする大乗仏教思想と修己治人の思想や『中庸』などを含む儒教の思想的枠組みから導かれていると考えられる。

茶道は単に五感を楽しむだけのものではなく、竹心が指摘したように、自己と対峙し、豊かな人間関係を育むという繊細な感覚を備えた文化である。正直清浄禮和質朴の精神は、時代や環境の変化にもゆるぎのない普遍的なものであり、竹心の批判した点は現代の茶湯界にも通じるものがある。

人間教育の場として人間関係を育む場として、茶道を次代に伝えることは変化の大きい社会にとっても有意義なことであると考える。竹心

が求めた茶道の本質を学ぶことは、現代に生きる我々が茶道とどう向き合えばよいのか、また、将来に向けて茶道をどのように伝承し守り伝えていくのかという課題について一つの指針を示してくれるのではないかと考える。

二、本論文の評価さるべき特色

① 不住斎竹心は江戸時代文化の爛熟した元禄時代に青年期を過した。この頃茶道は、遊興に流れて茶道の本意を失い、竹心の言をかりれば「古風をそしり、饗筵の風流、器軸の玩興となし侍ること本意なき事なれ」(『源流茶話』)という有様であった。藪内家五代家元となった竹心は、これを激しく論難し、利休の正風に帰るべき事を主張した、当代を代表する茶人であり、『源流茶話』などの著述によって後世の茶道にも大きな影響を与えた。

このような勝れた茶人であったにも拘わらず、彼の全体像を明らかにする学問的研究は、これまで現れることがなかった。岩田氏の本論文はその嚆矢と言って過言ではない。

② 論者岩田氏は、本論文作成に当って、持前の行動力によって、精力的に資料を集めた。全国の図書館を調査して関係資料をさがし、竹心の実父や竹心と関係深い北尾家については美濃大垣に出向いて調査を行い、竹心周辺の重要人物である建仁寺雲外についても現地におもむいて資料を集めるなどした。

筆まめであった竹心の著書は三十種もあるとされるが、論者はその主要なもの十八種に目を通し、その内容を解説し、更に竹心の茶書を取り上げている他の人の書物まで調査吟味するという周到さを発揮している。

③ 本論文は「序論」「本論」「資料」の三部から成る。そのうちの本論は二篇よりなり、その第一篇は、竹心の系累と周辺の人物、いわば竹心の人間関係についての考察であり、第二篇は竹心の著述や作品を通しての思想の研究であるが、第一、第二のいずれにおいても、右に述べた如き周到な資料収集とその吟味の成果が現れ、説得力のある論となっている。

④ 本論文に「思想と背景」というサブタイトルが付せられている如く、論者のいちばんの関心は竹心の茶道思想の究明である。

一般的に誰かの思想を研究しようとすれば、その人の著作が一等資料として中心になるのは当然で、本論の論者もその点についての怠りは

ないが、同時に論者は、竹心の好みの道具である「女郎花蒔絵棗」と竹心の自画像である「背面自画賛」の考察を通して竹心の茶道思想を活写してみせる。これは本論文中の最も興味深いところであるとともに、また、本論文を、これまでのいろいろな竹心研究中の白眉に押し上げさせるところのものでもある。

竹心好「女郎花蒔絵棗」には、一本の女郎花が棗の胴部から蓋に伸び、更に反対側の胴部へとまっ直ぐに伸びている図が蒔絵されている。この女郎花の図柄はおそらく珠光の「お尋の事」の最後に付された

ここにしも　なに匂ふらん　女郎花
　　人のもの言いさがにくき世に

に触発されたものであろう。僧正遍照のこの歌に珠光が読み取ったのは、世の人々の物言いがさがにくい（うるさい）からと言って、それを気にしたり、咲き方を変えたりしようとはせずただ無心に、自然に、おのれのあるがまゝに咲いているだけの女郎花の姿であり、そこに茶道の究極のあり方をうつし見たのであるが、竹心もその心をおのれの茶道のありように汲み入れたのである。「この棗に竹心が託した心は、現世の誤った風潮に流されることなく、天に向かってまっすぐ咲く女郎花のように正しい道を進むべきであるという心である。曲がることなくまっすぐに伸びた道の先に鎮座するのは千利休であり、茎の姿に己の進む茶道を重ね合わせているのである」と論者は解説している。

竹心の自画像「背面自画賛」は、こちらに背中を見せてむこう向きに坐る人物に

いかにせんかのにむかへば　世にそむく
　　そむことまゝよかのにむかはむ

此坊主真向きになりて坐したるを
　　背面（ソムク）と人のみるぞおかしき

という賛の着けられたものである。

二首の歌意を論者は、「どうしようか、かの利休に向かえば世に背（そむ）くことになる。背くことになっても仕方がない、利休の方に向かおう」「この坊主は正しい方向に真向きになって坐っているのに、背いていると人が見るのはおかしなことである」と解き明かす。こうして論者は、「女郎花蒔絵棗」と「背面自画賛」から、そこに込められた竹心の思想をありありと浮かび上らせて見せた。その力量は高く評価されてよい。

⑤　第三章においては、竹心の思想が、今度は定石どおり、彼の著述を基礎資料として考察される。

ここで先ず取り上げられるのは、竹心の「正風流」と「異風流」の思想である。正風流とは、詮ずるところ利休の風であり、織部、宗旦、遠州、光悦等はすべて異風流である。これを論者は、竹心の著作を本にして一覧表として示す。このあたりは、論者の古文読解力と内容整理の巧みさがうかがわれるところである。

⑥　第三章の最後では、竹心が標榜した「正直・清浄」「禮和・質朴」が論じられる。ここでも論者の整理の巧みさが光る。

三、残された課題

既に指摘したごとく、本論文は竹心の全体像を浮かび上がらせた初めての論考として高い価値をもっている。しかし敢えて難点を挙げれば、特に第三章以下で扱った思想論においていま一歩の深化が望まれるところがある。

総じて思想の研究において、その研究の優劣を決定的に左右するのは、論者自身の思想的成熟度である。これはしかし一朝一夕にして身につくものではない。だが本論文の論者はこの方面での素質を十分に具えていることが看取される。竹心の思想研究の深化と自身の思想の深化とは相伴うものであることに思いをいたしての更なる歩みを期待する。

四、審査結果の要旨

以上の如き観点から、本論文を上記三名の審査委員によって、着想の独創性、叙述の的確さ、構成の整合性などにわたって慎重に審査した結果、全員の一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。